第 6 回ワーキンググループ会議

【鑑賞 WG】 議事要旨

日時　平成 29 年 1 月 20 日（金）　13:30～15:30
場所　北庁舎 3 階　会議室
出席　委　員 4 名、事務局 5 名、北　大 3 名

議題　「まちづくり」、「機能連携」について

■　今年度の検討事項について

新しい施設における活動事業の検討

・ 今回のプロジェクトは既存施設の建替えではなく複合施設の建設であり、新しい施設の方針や目指すべきあり方について一から検討している。その際、施設の規模や機能は新しい施設でどのような活動を実施していくのか決めておかなければ判断できない。そこで、今年度は新しい施設でのハード面の検討ではなく、活動事業の検討を行っている。それを踏まえ、来年度からハード面の検討を開始する予定である。

■　前回までの振返り

キーワード「ついで利用」に関するアイデア

・ 前回は、「ついで利用」「フレキシビリティ」をキーワードにアイデアの検討を行ったが、新しい施設のあり方として、施設全体がホールのような場所になると良いという意見が出た。ホールのみが文化芸術活動の活動場所ではなく、施設全体を対象とする考えは基本構想のテーマとも合致しており、施設設計につながる方針ともなるように思う。

1. もったいないプロジェクト

・ ゴミやリサイクルに着目したアイデアであり、文化芸術活動を手段として用いることで不用品に新しい価値を見出し、結果的に文化芸術活動への参加の機会を創出していくアイデアである。

2. 紅白コミセン合戦

・ 市内各所で活発に実施されているコミセンの活動を共有することを目的に、年に一度各種サークル団体が集結して行うイベントである。

3. サイン考案部

・ 情報発信の方法を工夫することで、本来の目的とは異なる活動への参加を促したり、文化芸術に対する関心を喚起したりするアイデアである。

4. 15 の夜～親子の語らい

・ 親子で共通の映画や公演を鑑賞することで家族間のコミュニケーションを促進してい

くことを目指すアイデアであり、文化芸術活動を手段として用いる点に特徴がある。

5. チャレンジショップ in 市民プラザ

・ 一定期間で店舗が入れ替わっていくチャレンジショップを新しい施設にも設けるアイデアである。店舗の内容に変化をもたせることで、来訪者に対して新鮮な発見の提供とリピーター創出を図るアイデアとなっている。

6. 響きソムリエ体感プロジェクト

・ 音響と空間の関係を学ぶアイデアであり、市民の諸室を使いこなす能力を養い、バリエーション豊かな利用を促進していくことで、諸室のフレキシビリティを担保することを目指すアイデアである。

7. シアター de アフターパーティ

・ 公演後の打上げを市民と公演関係者が一緒に行うイベントであり、公演者は観客のリアルな感想を受け取ることができ、一方の市民は公演関係者とのネットワークを持つことができるなど、公演者と鑑賞者双方の活動の広がりと展開が見込めるアイデアとなっている。

■ キーワード「まちづくり」について

<u>施設全体で備品を管理・共有するアイデア</u>

・ ピアノや鏡のような特定の諸室に設置される備品を諸室の用途に合わせて設置するのではなく、場所を固定せずに様々な部屋へ移動可能にしてはどうか。

・ 現在、部屋の用途と活動内容が咬み合わない状況がしばしば起きている。例えば、空き部屋の状況によって畳の上でヨガを行うことがある。本来、畳はヨガをするための場所ではないため、畳が傷みやすいなどの問題も起こっているようである。畳の上にマットを敷く案もあるが、小中学校にあるような移動式の畳の導入を考えてはどうだろうか。

・ 諸室の用途に合わせて備品を設けるのではなく、活動内容に合わせて備品を揃えていくアイデアであろう。初めから全ての備品を揃えるのではなく、活動状況に応じて備品を拡充していくことも考えられる。

・ 山形県には舞台の大きさと形状が同じ２つのホールがあり、２つのホールで備品を共有している施設もあるそうだ。移動した先の空間が山形県の事例のように同じ大きさや形状であれば使い勝手が変化しないため良いが、使い勝手が異なる場合の対処の仕方や工夫など、利用者側の柔軟性が求められるだろう。

<u>まち全体が一体となる瞬間の創出</u>

・ 苫小牧のアイスホッケーのように、文化芸術活動も市民が一体となって盛り上がる瞬間や、イベントに向けての盛上がりなどがあると良いのではないか。

・ 以前、苫小牧のアイスホッケー人口は各小学校に１チーム結成できる程多かったが、現在は複数の小学校に１チーム結成できる程度に減少している。加えて、アイスホッケー

のリンクを作成する人の減少や用具代が高価なことなどの理由からもアイスホッケー人口は減少している。

- アイスホッケーは歴史があるため、未だ盛上がりがあるように思う。苫小牧でアイスホッケー以外に長く活動している文化に吹奏楽が挙げられるが、北海道全体では歴史があるとは言えないように思う。
- 必ずしも一体となる瞬間をつくることを強いる必要はなく、様々な人が文化芸術活動に興味を持つようになり、結果的に市全体の雰囲気が共有されているといった考えもあるのではないか。

文化団体協議会（文団協）の役割

- 文団協の世代交代が上手くいかず、様々なイベントを開催するが次の世代につながった活動が出来ていないように思う。
- 多種の文化芸術活動の団体を集めた際の活動内容や可能性を追求していく必要があるだろう。それらを明確にしておかないと、集まることの意義や相乗効果が見込めないものになってしまう。
- 大きな組織をつくった際は、凝り固まることのない柔軟な組織づくりに注意する必要があるだろう。市民の意見を聞く機会を定期的に設け、それに応じて役割を少しずつ変えていくことができれば良いのではないか。

文化芸術活動拠点としての中心市街地の役割転換

- 苫小牧の問題点として、中心部の衰退が挙げられるだろう。新しい施設の建設を機に中心部を活性化させることができると良いのではないか。市役所や文化会館に要件がない限り中心部に市民が来ないような現状がある。
- 中心部には歓楽街があるので、新しい施設が中心部に建設された場合は、来訪者のついで利用を促せるのではないか。例えば、施設にお店の割引サービス券を置き、公演者と鑑賞者の交流の場として歓楽街が利用されることが考えられる。
- 中心部に市民がおらず、郊外に市民がいるという現状を考えた場合、そもそも中心部を活性化させる必要があるかを考える必要があるだろう。
- 中心市街地活性化といった際、イオンのような商業的な活性化なのか、文化芸術活動の活性化なのかといったように、どのような活性化なのかを明確にすべきであろう。新しい施設が中心部に建設された場合の活性化は後者の方が良いだろう。その際、例えば中心地の空き店舗をサークルの活動場所として提供したり、これまで出てきた「チャレンジショップ in 市民プラザ」の店舗が空き店舗に入るアイデアの展開が考えられるだろう。
- 中心部でお金が回るような時代ではないため、イオンのような賑わいを求めるのではなく、文化芸術活動の賑わいをイメージする方が適切であるように思う。

施設が目指すべき目的に沿った敷地検討の必要性

- 現在、市の内部では建設地の検討を行っており、①市民会館跡地、②東小学校跡地、③旧 egao 跡地、④総合体育館南側の４つの土地での比較検討を行っている段階である。
- 新しい施設を苫小牧の顔と考え、駅前の計画を希望する意見もあるが、市民ホールは駅前を活性化させることを目的にする施設ではないことに留意する必要がある。基本構想で定めているサードプレイスとして最適な場所を検討する必要があるだろう。
- 人の流れをつくることを考えた場合、駅前のように人のいない場所に計画し、人を呼び込む努力をするよりも、人が多い場所の近くに計画する方が人の動きが自然に思う。

子どもの居場所としての施設の役割と重要性

- 苫小牧が抱えている問題として、DV のような家庭内暴力が多いことが挙げられる。子どもの成長を考えたときにまちづくりが果たすべき役割は大きく、「15 の夜～親子の語らい」のようなアイデアをもっと実施する必要があるように思う。
- 家に引きこもってしまった子どもを施設に招待し、スクールソーシャルワーカーなどの協力を得ながら、新しい施設を子どもの居場所とするようなアイデアが考えられないか。
- 両親が共働きで朝ごはんが食べられない子どもなどを対象にごはんを提供する「子ども食堂」が音羽町にあり、こういった取組を新しい施設でも展開できないだろうか。

立地条件を生かした既存のイベントとの連携

- 新しい施設の立地を既存のイベント会場に隣接させることができれば、既存のイベントとの連携が容易になるだろう。その際は、新しい施設がイベント中の休憩場所や雨天時の会場としても利用することが可能になるので、既存イベントと新しい施設との相乗効果が期待できるのではないか。
- 新しい施設の近くで既存のイベントを実施してもらっても良いだろう。既存のイベント会場を施設の周辺で毎年変更して開催することで、敷地周辺部を活性化していくことも考えられる。

中高生の口コミを活用した情報発信のアイデア

- コストパフォーマンスの良い情報発信の方法として口コミが挙げられる。特に、中高生への口コミの効果は絶大であり、中高生を媒介にその友達や親など多くの人に情報が知れ渡る。
- 現在、中高生のバンドマンが練習場所を探しているそうだ。新しい施設は中高生の居場所としても重要な役割を担うだろう。

■　キーワード「機能連携」について

他ＷＧで検討されたアイデアの紹介

- 現在、検討委員会では事業体系図の案を作成している。事業体系図は、施設の目指すべき方向性と活動内容を関連させ、現在ワーキンググループ会議で出されている活動事業のアイデアを体系化したものと言える。
- 活動部会では、ゴスペルや料理などの他分野と文化芸術活動と連携を狙った「おもてなしフェスタ」や、市民がやりたいと思っていても実施することが難しいアイデアをプロのアーティストと共に実現する「腕利きサポート部隊」、バンドを通して世代間交流を促す「見習い親父バンドプロジェクト」などのアイデアが提案されている。
- 展示・窓口部会では、文化芸術活動の参加経験をポイントとして記録し、リピーターの創出を図る「とまこまい文化口座」や、施設の広報に子どもが特派員として参加し、レポートを載せることで文化芸術活動への関心を高める「教えて！子ども特派員」、市民の創作活動自体が展示となる「ワクワク展示室」などが提案されている。
- 現在、新しい施設の機能ごとに部会を設け活動事業のアイデアを検討しているが、事業体系図をみてもわかるように、それぞれの部会で機能を跨いだ検討ができている。現在の事業体系図では提案されたアイデアを部会ごとにまとめているが、今後はそれらを機能ごとに振り分ける作業を行なっていく予定である。

■　今後のスケジュール

次　回　（第 7 回）: 2 月 22 日（水）13:30～@市役所 2 階 21 会議室